

かせかけ

編集 沖縄県立看護大学
広報専門部会
発行 平成20年3月5日



目次

- 開学10周年記念に向けて……………2
- 「開学10周年記念」に向けての
取り組み……………3
- 「社会人学び直しプログラム」
のスタート……………3
- 「平成19年度 卒論発表会」……………4
- 海外研修セミナー……………5
- 学生活動「サークル紹介」……………6
- 「大学院論文中間発表会」……………6
- 「第8回オープンキャンパス」……………7
- 「教職員の動き」……………8
- 「別科 助産専攻」の開設……………8

開学10周年記念に伺けて



沖縄県立看護大学
学長 野口 美和子

沖縄県立看護大学は開学10周年を迎えます。その間、389名の卒業生を送り、県内の各地で先輩看護職の方々のご指導を受け、良い働きをしております。又、大学院博士課程も整い、県内の看護職の知の拠点としての役割をはたし始めているところです。沖縄の将来を見据えて、看護の基礎教育を大学でと声を上げて下さった沖縄県看護協会ははじめ、看護職の方々、そして看護職の願いを後押しして下さいました医学界、教育界の方々の先見の明に、今ふたたび感謝しています。又、課題の多い中、大学の開学に向けて関係機関の力を結集して下さいました県当局のご苦勞を思い出し、胸が一杯になります。みなさまのお陰で、良い学生を集め、良い看護職を世に送り出すことができました。初代学長上田礼子先生はじめ、教職員の皆様、そして看護の心を伝え教えて下さいました県内の実習施設の保健医療福祉職の方々にも厚く御礼申し上げます。看護学教育の礎をしっかりと築いていただきましたので、それに報いるためにも更なる大学改革を進めていきます。

沖縄の文化に根ざした看護と看護教育のあり方を求めて、精進したいと思います。そして、沖縄を愛し沖

縄の人々に心より奉仕し、離島の隅々にも進んで勤務する学生を育てていきたいと思ひます。今年度は、沖縄県の助産師不足解消のために、又「沖縄らしい質の高い助産師育成を」の求めに応じて、別科助産専攻を設けることができましたことは、私どもの大きな喜びです。又、大学大学院の機能を生かして、沖縄県民の健康増進のための仕事を沢山させていただきたいと思ひています。大学院には、中堅の看護職の方々がそれぞれの課題を持ち入学され、実践的で即役に立つ研究成果を持って現場に戻られています。これをより拡大していくために、まず大学院へのアクセスを容易にする目的で、文部科学省の“社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム”に申請し採択されました。本年2月から講座を開講しています。

その他にも、看護大学が果たせることはたくさんあるはずで、県民の皆様、看護職の皆様からのご要望に応えるために、大学に地域交流室を設けています。次の20周年には、“看護大学があつて本当に良かった”と県民の皆様から評価していただくことを目指して教職員一丸となつて努力したいと思います。



「開学10周年記念」に向けての取り組み

事務局長 有銘 政勇



沖縄県立看護大学は、平成11年に県民や医療・看護関係者の大きな期待を受け、県立コザ・那覇看護学校、沖縄看護学校の輝かしい歴史ある看護教育を受け継ぎ、ここ那覇市与儀の

地に開学しました。早いもので今年の3月には学部6期生が卒業し、また、4月に記念すべき10期生が入学してきます。また、大学院は3回目の修了式が行われます。

そこで、開学10周年記念事業について検討するため昨年末に大学関係者が、一同に会し「記念事業実行委員会」を開催しました。その中で今年10月に記念式典の開催、記

念誌の編集、記念講演会の実施等が決まりました。また、本学には校歌(学生歌)が無いことから制定することや看護大学グッズの制作についても了承されました。

平成21年度から本学の管理運営は、県から公立大学法人に移行する予定であり、学内において教育研究体制のあり方を検討するなど事前準備に取り組んでおります。

10年の歩みは、人材育成という長期的な視点で囲碁に例えると、まだ布石が始まった段階であり、熟慮を重ねつつ展開を進める適切な時宜であります。

開学記念の節目を、本学の開設・発展に携わった皆様及び在学生、同窓生、保護者と共にお祝い出来ますようご協力を是非ともお願い致します。

「社会人学び直しプログラム」のスタート

プログラム担当 教授 金城 芳秀

文部科学省の「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム(公募)」に採択された本学のプログラムをご紹介します。

本学では平成19年度より平成21年度までの3年間、「看護実践者(社会人)のための大学院博士前期課程入学準備プログラム」を実施いたします。本準備プログラムは、博士前期課程の入学準備と入学後の主体的学習を可能とする基礎力の養成を目的としています。ここでは、「看護研究リテラシー“読むべき論文を見出し、批判的に読む”の獲得のための非正規科目として行われます。受講者数は10名程度に制限され、講師陣との対話を中心とした18時間(4.5時間×4日、いずれも土日)コースが設定されて

います。講師陣は学内のみならず、県外からも第一人者が招聘されますので、受講生の学習ニーズに対応した、適切な学習支援環境を用意できると自負しています。さらに、新たなネットワーク環境とパソコンが整えられ、受講生一人ひとりに充実した参考図書が用意されます。来る8月、9月には2日間コースも行われます。

大学院に挑戦したいと考えているあなた！ どうぞ新しい学びの環境をご活用ください。参加が難しいと考えているあなた！ どうぞ遠慮なく、あなたの希望をお知らせください。あなたの学習ニーズに副ったプログラムを提供いたします！

「平成19年度 卒業論文発表会」

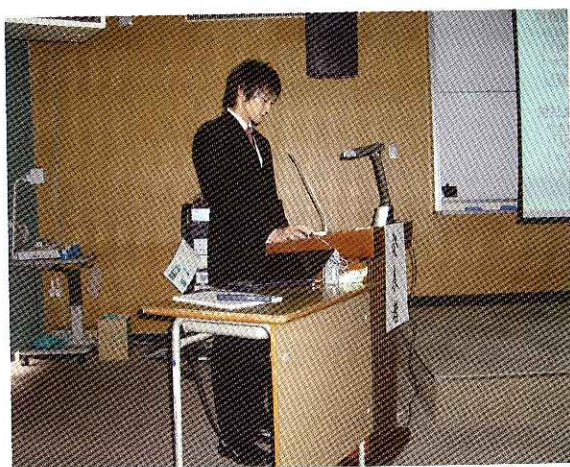
教務委員会

卒業論文担当 宮城 政也

卒業論文を完成させるために4年生は、自ら設定した研究テーマを多様な視点から吟味し形にしなければなりません。その過程の中では「思うように文献が見つからない」「計画通り調査が進まない」「結果が仮説と違う」「日本語が書けない」。逆に「おもしろい結果ができた」「研究って意外と楽しい」「はじめて大学に来ている感じがした」…など多くの学生が、悲喜こもごもを体験しているようです。その中で幾人かの学生は、事前にもう少し緻密に調査法を検討すればよかった。あるいは、もっと幅広く文献を収集すればよかったなど「もう一度やればよいものができた」と話しています(後の祭りなのですが…)。しかし、何気ない言葉なのですが、私はこのような発言は、卒業論文がスポーツ競技的要素を含み、心身両面におけるねばり強さを要すること、さらに日々の研鑽が重要で

あることを^{からだ}身体で感じることの出来る学生が存在していることを示しており、卒業論文の教育的価値の高さ、ならびに、私たちの設定する到達目標への重要な評価項目に値すると考えています。

本学の卒業論文発表会は、今年度で6回目を数えましたが、在学生のビッグイベントとして定着してきた感があります。当事者の4年生はもちろん、1・2年生の参加も多く、特に3年生については年々興味関心の高さを感じます。このことは、伝統的に学生が卒業論文を一つの山として捉え、その山を登るためにどのような準備(トレーニング)をすればいいのか模索していることの表れともいえます。いずれにしても卒業論文という実践(試合)を通して、心身を強化することは大学の特権であり、単科大学である本学において、その果たす役割は大きいといえるでしょう。



海外研修セミナー —ハワイ研修 2007—

学生引率教員 嘉手刈 英子

8月26日の13時30分、ご家族、教職員に見送られて、本学3年生14名、大川嶺子先生と共に那覇空港を出発した。羽田空港からリムジンで成田空港に移動して国際線に乗り換え、ホノルル経由でカウアイ島リエフ空港に到着したのは、同日のほぼ同じ時刻であった。暦の上では沖縄—ハワイ間を瞬間移動したことになる。空港ではカウアイ大学のヤマモト先生とコリンさんが既に待っておられた。ホテル到着後、オリエンテーションや食料品の買い出し、中庭での歓迎夕食会と続き、21日間のハワイ研修が始まった。今回参加した学生ほとんどが海外旅行の経験があり、メンバー間の協力体制もとてもよかったので、全期間を通して落ち着いた雰囲気の中で研修が進んでいった。報告集からもわかるように、学生達にとって研修は内容の濃い充実したものであった。

約3週間の研修のうち2週間はカウアイ島で、続く1週間はオアフ島で過ごした。カウアイ島での宿はコンドミニウム式のホテルで、100m程離れたところに南太平洋からの波が押し寄せる海岸があった。周りにもいろいろなタイプのホテルが散在していたが、ほとんどの建物が2階建であった。滞在中に地元の人から聞いたのだが、建物は周囲の椰子の木より高くしてはいけないという規制があるということであった。数字ではなく周りの木との関係で建物の高さを制限するという発想を面白いと思った。

海岸沿いにはモクマオウに似た木が立ち並び、深いブルーの美しい海は沖縄と似ていた。しかし、沖縄の遠浅の海と違い、波打ち際から数m離れたところで急に深くなっていて、透けて見える海底のあちこちには岩肌が見えていた。押し寄せる波の力も強く、波打ち際の砂地に立っていると海中に吸い込まれそうな気がした。押し寄せてくる高い白波が徐々に低くなりながら近づきはじける様子は、見ていて飽きることがなかった。カウアイ島は地域によって雨の多いところと乾燥しているところがあり、ホテルのある地域は毎日のように、夜間、雨が降った。雨で濡れた道路は日が昇るとともにみるみる乾いていったが、庭や木々には深い緑が残った。朝早く、まだ周囲の空気が湿っている頃に、海と反対側に遠くそびえ立つ山の上に虹がかかり、日が昇るに従い消えていくのを何度も目にした。

オアフ島での宿泊は交通の便のいいワイキキにある高層ビルのホテルであった。米国内外からの観光客も多く、学生たちはカウアイ島とは違う雰囲気の中で生活体験ができたと思う。今年のハワイ研修は、帰国の時、沖縄に台風が上陸したために成田で1日足止めというおまげがついた。大学事務担当者のすばやい対処を通して、この研修が多くの関係者に支えられて行われていることを改めて実感することができた。



学生活動
サークル紹介

「スポーツサークル」

2年次 大城 辰徳

スポーツサークルは男女合わせて60人を超え、看護大学で大人気のサークルです。活動は週2回、火曜日と水曜日に午後6時から9時まで本学の体育館で行なっています。活発で多趣味の学生が集まっており、様々なスポーツを実施しています。人気があるのは、様々なスポーツを取り入れていることで、一人一人が楽しめること、人数が多く体育館がとてにぎやかな交流の場となっていることです。サークルの雰囲気は和気あいあいとしており、ハンドボール、フットサル、バドミントン、バスケット、卓球、フライングディスク、インディアカなどを通して先輩や後輩・同学年のサークルメンバーと友達になるきっかけが作れたり、より友情が深まったり、また友達の輪が広

がったりしています。

サークル活動が終わった後の体育館内や園庭などで、みんなでおしゃべりをして、勉強や実習などまじめな話から、冗談・雑談など交流の機会も自然に生まれ大いにぎわっています。



「大学院論文中間発表会」

大学院教務副委員長 神里 みどり

平成19年度博士前期課程における学生5名による論文の中間発表会が平成20年1月10日(木)に開催されました。研究テーマは、臨床現場の問題を課題テーマとして取り上げた課題研究が2席、修士論文が3席で、その主なる内容は、救急初療における看護師の初期アセスメントや緩和ケアにおける質評価、デイサービス利用者におけるプログラム検討、大卒臨床2～3年目の看護師の学習ニーズ、1人暮らし要介護高齢者のソーシャルサポートに関する研究など各自の専門領域に特化したものでした。中間発表会の目的として、客観的視点で他

領域に所属している先生方からご指導が受けられるので最終稿に向けて論文をまとめていく上で貴重な示唆が得られることが大きな利点です。発表会にご参加して頂いた先生方から温かい眼差しで見守られながら、多くの建設的なご意見を頂いたことは、学生にとって何よりも貴重な学びにつながったようです。修了まで残り2ヶ月ですが、最後の力を振り絞ってより完成度の高い論文ができることを期待しています。

努力した分だけ自分の知となりそして肥やしになる!

第8回オープンキャンパス

広報専門部会 安里 葉子

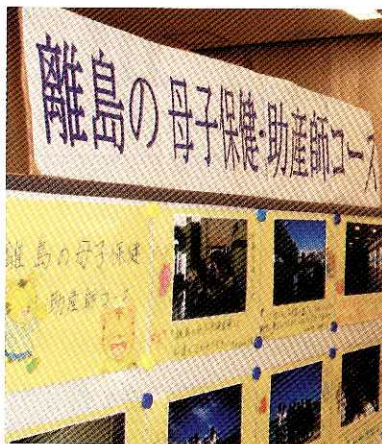
第8回オープンキャンパスは平成19年8月4日(土)午前10時～午後3時に開催されました。今年度の参加者は270名であり、昨年より29名の増加でした。オープンキャンパスの企画内容は、従来看護系各領域の講義や演習の特徴をいかした体験コーナー、在学生とのフリートーキング、教員による個別進路相談、大学構内を案内するキャンパスツアー、インターネット体験の他、今回は新たに「島嶼から学ぶ保健看護」をテーマに離島実習・遠隔教育関連コーナーのブースを設置しました。離島に関連する講義や実習を行っている領域(基礎看護、助産、老年保健看護、地域保健看護)の学習内容の紹介と、ブース内に設置されたFCSシステムを用いて離島の保健師さんとのリアルタイムでの通信場面を見学、体験できる機会を設けました。参加者からは“離島の保健医療に興味を持てた”との意見も聞かれ、本学の教育の特徴の一端を知って頂くことができたのではないかと思います。

各領域での体験コーナーには多くの参加者が訪れ、ボランティアの学生や教員の説明を熱心に聞いたり、実技・演習

の体験や模擬患者の体験を通して、看護の学習に関心を示す様子が覗えました。

アンケートに回答して頂いた179名からの評価では「とても良かった」151名、「まあまあ良かった」25名、「どちらともいえない」2名、「あまり良くなかった」と「良くなかった」は0名でした。参加者からの意見では“在学生、教職員の対応に好感もてた”、“看護についての興味関心が深まった”、“本大学で学びたいという気持ちが強くなった”などがあり、全体的に良い評価が得られました。また、少数ですが大学全体の説明がほしいことや教員と話す時間ももっとほしいという声もあり、今後検討すべき課題が見いだされました。オープンキャンパスの開催をとおして、本大学に入学を希望する学生や地域の方々に広く大学を紹介すると共に、医療・福祉・看護に関心を持てるよう機会を作り、将来の看護職の担い手を広げていくという使命を実感することができました。

最後に、オープンキャンパスの開催に際し、ご協力を下さいました学生ボランティアの皆さん、教職員の皆様に深く感謝申し上げます。



「教職員の動き」

2007年9月15日付で、地域保健看護の助手に着任いたしました。

私は本学の1期生で、卒業後は大学病院の看護師、市役所の保健師としての勤務を経て、今回初めて教育の仕事に携わることになりました。

久々に戻る大学は、創立したばかりの手探り状態の学生当時と比べ、教育環境も整い始めており、今では当たり前にある授業評価や国家試験対策は、当時、学生自ら必要性を感じ発信し、先生方と創り出してきたことを懐かしく思います。同時に、そのお世話になった先生方が、上司や同僚と

地域保健看護

助手 仲間 紀子



なることにまだ違和感を感じてもあります。

教育者としても研究者としても新人ですが、まずは学生にとり身近な相談相手となり、必要な環境は自ら創り出せることを少しでも伝えていき、また研究者としては、地域で奮闘している保健師の活動がより言語化され実践の助けとなるよう、研究を通し地域へ還元できればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

「別科 助産専攻」の開設

教務部長 前田 和子

沖縄県には助産師が100名不足していると言われて久しい。産科医不足もますます深刻化し、出生率全国第一位を誇る県として由々しき状況が続いている。本学は4年間の学部教育の中で10名の助産師を養成してきたが、焼け石に水の感があり、学内からも新たに助産師養成の仕組みを創造しようとの機運が高まってきた。ちょうどその折り、日本助産師会沖縄支部の力強い幹部の方々とお話し合う機会を得た。その日から7ヶ月余り、沖縄県女性団体連絡協議会ははじめ看護協会や医師会など多くの方々の協力を得て、あれよあれよという間に県で定員20名1年コー

スの「別科助産専攻」設立計画が決まった。すでにこの時点で大学では玉城清子教授を中心とした作業部会で申請書類はすでに8割方完成していた。苦勞するだろうと思っていた教員確保も優秀な人材3名が決まり、また実習施設の協力も順調にいき、今年1月末に文部科学省から正式認可が降りた。3月の入学試験日には沖縄県の母子保健に関心の高い看護職者および看護学生の皆さんが押し寄せて下さることを期待している。そして、沖縄県の隅々まで十分に、優秀な助産師を送り出し、県民が安心して子どもを産み、育てられるよう支援できることを願っている。

かせかけとは、琉球古典舞踊女七踊りの一つです。総とは紡いだ糸を巻く道具で、総掛けとは布を織る糸をこしらえている様子を指しています。この踊りのように丹念に糸を紡ぎ布を織って着物に仕立てていく、その一途の心と「技術」・「感性」は、「知識」の継承・創出とともに、本学の看護職者を生み育てる教育・研究の原点に相通するものであらうと、広報誌の名称にしました。



かせと杵

編集後記

本年度よりスタートした「社会人学び直しプログラム」の第1回目が2月に修了し、好評を得ています。また、新たに4月から開設される別科助産専攻では、助産師の養成が期待されています。同時に平成20年は本学開学10周年を迎えます。地域のニーズに応えると共に看護教育の質の向上をめざし、教職員一同努力していきますので、今後とも大学諸関係機関の皆様からのご支援・ご協力をよろしくお願い致します。
(広報専門部会)

沖縄県立看護大学

〒902-0076

沖縄県那覇市与儀1丁目24番1号

TEL (098) 833-8800 (代表) FAX (098) 833-5133

<http://www.okinawa-nurs.ac.jp>